

教師研修の課題（二）

——つくしあい運動をめぐる諸問題——

小 山 典 勇

はじめに

本宗の教化運動として昭和四十四年提唱された「つくしあい運動」は全宗派的な展開に至らないまま消失した。その面影は現在かろうじて「つくしあいの理念」に名を止どめている。

一体何が「つくしあい運動」を阻んだのか、その障害はどこにあったのか、そして、現時点でその障害は解決されたのか。前号に引き続いて本宗の教化活動の実状とその問題点を考察し、教師研修の課題の二、三を明らかにしていきたい。いいかえれば教化推進の鍵とこれからの教化の方向を探ってみようとする大きなチャレンジである。少しきざに表現すれば、オーバーホールつくしあい、パワーアップつくしあい、そしてニューつくしあいへの飛躍を展望することしよう。

検討材料として総合調査の分析研究の成果を利用し、次の三点を考察のポイントとしよう。教化という考え方はどう理解されているか。教化活動をする必然性は教師にどれほど浸透しているか、教化活動は寺を強くすることが目標なのか。

一、教化とは何か

教化という考え方(理念)を教師はどう理解しているのか、そのとらえ方に問題はないだろうか。教化とは何か、前号で私見を述べたがもう一度図示すれば次のようである。この基本的立場が異なると、全体像も異ってくるからである。

【教理】(いわゆる教相) — 【実習】(いわゆる事相) — 【生活化】(いわゆる教化活動、しかし筆者にいわせれば、この段階は教師の日常生活である) — 【社会化】(これからが教化活動であり、社会的実践運動への展開である)。

これを一人の教師の「生きる営み」として構築するところに発想のミソがある。しかもここには出家・在家という立場の違いを予想していない点でも従前と異なるのである。

それではこれまでの教化はどう考えられていたのか、一般論としては、

【教相・事相】そして【教化】

という仕組みである。ここには出家教団として、僧侶・教師と檀信徒という立場の違いを認めている。既に明治の「肉食妻帯かってたるべし」以来、出家体制が崩壊して、現在では大多数がおかしいと感じながら、依然として体制として建前がまかり通って来たのであり、現在もそうである。(この出発点を直視する必要に迫られている。)

ところが「つくしあい運動」などの事例にしても、新宗教の進出などを契機として、前述の「教相・事相」では檀信徒に対応できないことに気がつき、「そして教化」が叫ばれるようになったのである。教師が職務として行っていることが檀信徒には理解されていないことに気がついたのである。したがってそこで行われることは「行事の説明」、「行事への参加の説得」であり、行事を補完するものとしての教化なのである。

ここでは教師自身の生き方が問われる必要はない。伝統の名の下に行われてきた、あるいは行われる行事であるがゆえに、現代の諸問題をどう考えるか、このような問題意識は視野に入らないし、入る余地もない。したがってここでは教師は自分のよって立つ足場を検討せず、懸命に屋根を築いているのに等しいのである。

行事の意義を主張するにしても穴埋め的な手続き、部分的な問題処理で終わることにならざるをえない。つまり「寺院の存続」が主たる発想であり、したがって伝統的行事という限定された場から抜け出るものではない。このような状況では伝統を誇る「いわゆる事相」が重要な役割を演じることは自然の勢いといえよう。つまりその結果として「そして教化」という構造が維持されるのである。ここに「つくしあい運動の発想」の問題がひそんでいるのではないか。

それで教化についての批判はあったのか、この点について、吉田宏哲教授は「教化の理論たる教化学は、学問として成立していなかったということが出来る。そしてひとえに、教化学の方法に対する自覚の欠除による」（『教化ガイドブック』p38）のであるから、方法に問題があると指摘する。そして同論文は「方法の確立とそれを通じて教化学の体系を成立」を目指すのである。ここに教化を方法論として切り出している点で、いいかえれば基本的立場で、筆者とのズレを認めざるをえない。このズレはいいかえれば、「教学およびそれともなう教化学の成立」という観点と、「教学」という総合的な体系化の中に教化（活動、および現代への対応）をも含める」考え方との開きとも思われる。

それでは伝統的な「教相・事相」には現代では意味がないのであろうか、あるいはどうして成り立ってきたのであろうか、考察する必要がある。むしろそれなりの意味と役割を果たしてきたと考えるが、それが今、その意味が曖昧になり、役割、機能が十分に理解されていないところに問題があるといえよう。

筆者にとって、事相とは具体的に行事として行われる儀礼の場とする（前回の狭い意味で同じ）。そこで演じられたことが取りも直さず仏の境界であり、そこに集うものがみな等しく仏の境界に参入し、法悦の境地を楽しむのである。場面は俗世間から出世間へ脱出し、気分は日常から非日常へ高揚し、自己が一大飛躍をするのである。本来さながらの境界が現出されているのである。これが真言密教のいう教化であると理解している。この意味で文字もまた仏の説法といえる。ただし、これには二つの問題がある。その一は演技者が教相（しぐさ、役割、場面設定の意味、内容）を理解している教師には特に抵抗があるものではないが、見る立場、参加者としての壇信徒には経文一句でさえチンプンカンプンなのである。その雰囲気になじめず、つまり有り難いような、有り難くない一時といえる。（ところでチンプンカンプンにもまたそれなりの意味があることは認めて、先を急ごう）

その二は地域や団体が限られるという問題がある。つまり秘密、秘儀を優先させることによって、伝統を保持するという名目の下に、閉鎖的な体質が生まれ、非公開に走り、結果として自己の内面の神秘性に気がついていくという本来の秘密の意味とすり替えられる危険な一面があることを指摘しなければならぬであろう。

次に筆者が指向する教学の範囲や内容については、いわゆる伝統教学を指すものではない。勿論、伝統教学を無視したり、現代に適應しないなどと考えるものではない。①自分にとっての生きる根拠、②生きていく目標、③そのために行うべき課題を三本柱として、現実の問題にぶつかりながら、伝統教学からそれに対する答え、指針を学び、自分なりの進路を模索していく、このような過程で築き上げられていくものが教学であると考えている。

この点について吉田宏哲教授は「教化学の客観的基礎は宗教的価値にほかならないが、それでは教化学の主観的基礎……、宗教的価値が個人の内面においていかに芽生え、かつ成長し開花していくかについての宗教的・心理学的考察である」（p43）と批判的に自「」を模索し、その根拠は「宗教的価値の位置づけを大師の『十住心論』によっ

て規定することが可能である。」（p43）

ここでの疑問の一つは、教学のために大師に学ぶのか、それとも自己の問題の解決のための一つとして大師に学ぶのか、学び方の問題があるのではないか。これから出発という時おこる問題である。出発点を例えば大正大学入学时、これから初めて仏教を学ぶ段階とするか、あるいは大正大学を卒業し、一応仏教を基本的に理解習得したとする立場を出発点とするか、でおこる開きともいえるであろう。

したがって自分の目を、時代時代に先人の鋭意努力し、工夫した試み、その目標に向け、あるいはその理由、立場を考察することによって、問題と答とは見いだされていくものと思われる。いいかえると「寺院の存続」のための学習や研究ではなく、「仏法の存続」という視点に切り替えるべきなのである。自己の問題を解決していく営みが教学の基調である。新しい教学体系を構築していく基礎的な作業を進めるうえで、「つくしあい」の問題は例題となるのである。

前に図示したように、理論—実習—生活化—社会化を一貫し、しかもその基調に自分の生き方の模索（＝仏法の存続）をおく。これを縦の座標とすれば、横の座標には、この個人的な精神力、知的営みを他者との関わり、展開においておこす。このような全体的構図を教学としてみよう。この立場から「つくしあい」の発生、教化の位置づけ、意味合いなどを検討する必要があるであろう。

したがって教化とは何か、どう自分の（いわゆる）教化活動の中に位置づけているか、あるいはどのような見通しに立った教化活動なのか、第一の課題となろう。

この意味では吉田宏哲教授の次の言葉は我々に勇気を与えるものである。「教師は成仏した者でなければならぬ」という必然性は、必ずしもなくてもよく、むしろ教師も亦真剣に菩提を求める者であることこそが要請されてい

る。第二には、教師は菩提の何たるかを教えるのではなく、被教化者が菩提を求める生き方を生きさせることによって、自らもいきるのである。」(p 50)

そこで次に筆者のめざす教化の姿勢、視点を明らかにする必要がある。

二、教化の視点、姿勢をどこにおくか

二つのシナリオを紹介しよう。題して1「死者を見つめて」そして2「死をみつめて」である。◆印は陰の声である。このシナリオから教化の視点、姿勢を考えてみよう。

シナリオ1「死者を見つめて」

病院にて「ご臨終です」に始まる。亡くなった人が主役であり、家族(施主)などは脇役である。場面は葬儀に移る。愛別離苦の悲しみがつきまとうにしても、所詮他人事である。

◆もし自分の事であれば、一生に一度の大事な場面で、葬儀の終わるのを待ち兼ねて、施主は「初七日忌のお経をお願いします」などといいだせるものではない。住職もまたそれが当世風と心得るならばその識見、宗教性はどこへ。施主も教師も自分の立場、自己の問題であれば考えられるものではない。

葬儀、初七日がすめば四十九日忌の法事、そして初彼岸、あるいは新盆を迎える。そしてその後、一周忌からの年回忌、また墓石の建立、菩提寺への寄進へと展開する。こうして施主、家族には故人、祖先の供養が生きていく心の支えとなると説教され、感謝と報恩のおかげさまの生活が始まる。寺院では施餓鬼会、春秋彼岸、お盆などの行事が盛大に行われる。

◆これらの行事は伝統行事の顔として、本宗の七割りの寺院で行われていることは既に総合調査の指摘するところ

ろである。しかし毎年同じ事が繰り返されるのに、何故か不平も不満もでない。教師が工夫しなくても人は集まって来るのである。集まらねばならない必然性が檀信徒側にあるからであり、そこをうまくついているともいえる。しかし、檀信徒側には集まっても次への展開、連続性は考えられない。毎年繰り返される慣例であり、子どもの頃から身についた習慣である。先祖と自分を結んでいる情念にたっぷり浸ることに意味があるのであり、それが望まれているのである。

施餓鬼の思想は何か、また施餓鬼会のそもその目的は何か、主催者も参加者も問わないのである。なぜならそこで行われている行事は自分にとって何か、という問いかけがないからである。つまりその一時がすめば充分なのである。

ところがお寺を一步出してみれば、世間には不安と悩みとが満ち溢れ、苦悩の声がこだましているのである。ある日の新聞の折り込みチラシをみてみよう。

「悩める方に解決の道指導」、そして小さな囲み欄に「不幸はなぜ起こるか、一、運命とは祖先の因縁による一、運勢とは今世の因果である※障りと・祟とは○生霊・死霊によるもの○野狐霊・疫神によるもの○呪詛霊。怨霊によるもの○悪鬼・邪神によるもの○凶方位、廻り金神、鬼門等のおかしから受けるもの○バイオリズムから現れるもの（厄難等）○父母の性格のユガミが子供に現れるもの○自己の業（行為）から生ずるもの○先祖から染まった悪気のもの等様々でありますが……※これらの悪運は法華経五段加持により即身成就致します」

檀信徒は菩提寺に行く前に、ここに現世の悩みを相談する。「菩提寺へ行きなさい。そして先祖のご供養をして頂きなさい」と指示されて後日、檀信徒が寺に相談に来るのである。指導力は菩提寺にないのである。

◆過去が主役、中心の発想である。

◆後に残る施主、家族が自分なりに選択できる問題ではない。できることは供養の志を運ぶことである、施主も教師も考えるところは同一である。そして故人（＝先祖）に対する報恩が実践原理となる。弘法大師の四恩の中、父母の恩が強調される。国王の恩は説明がつかないので曖昧のまま不問に付される。過去からの影響＝悪い因縁となるべく受けたくないところにこそがけるだけである。チラシに見たとおりである。

◆しかし、次のようにも指摘されている。

「民間信仰の諸相での仏教と死のかかわりは、……死者の魂の救済、死後の死者の安寧という観念の発達はなく、死のケガレの祓除ということによって置き換えられたと言えるのではないか」《波平恵美子「霊の漂白―祟り信仰と仏教」p.317》

施主および家族、親族は亡者の追善を勤めるが、それは仏教本来の立場を離れて、ケガレを清め払うことに意味があると指摘されている。したがって施主、家族は家庭、仕事などが順調であるときには隠れてはいるが、病気や不幸が身内に続いて起こると、突然目を覚ました因習にとらわれ、苦しめられることになる。靈感商法など悪徳商法の繁盛が何よりの証拠となろう。先祖が災いをする、たよっているなど、事例は身近な所にいくつもあつた。このようなマイナス方向の環境をつくり、条件を支えているのが今日の寺院―檀家という関係であることはいままでもない。

◆このように「過去を主とする発想」にしたがえば寺院と檀信徒には「いわれない因習」が入り込みやすいのである。むしろ教師は自ら知らずにこの関係を作り出してきているといえよう。一体何のための教化活動といえはよいのであろうか。見方をかえれば、仏教の立場との二重構造になっていることであろう。このような寺院の現状、活動のあり方については他宗団でも研究をすすめる、また研究の成果が指摘するところでもある。曹洞宗、本願

寺などでは、例えば『宗門葬祭の特質を探る―修証義との関連において』同朋舎出版昭和60年、曹洞宗教化研修所薪水会、『葬儀・宗門信仰の道しるべ』曹洞宗務庁昭和62年。これらにおいては寺院の当面する役割としての葬儀を根本的に見直そうとしている。

◆さて以上のような寺院の現状を眺めると、檀信徒数の多少が寺院運営の鍵となり、それは寺院の経済的基盤の問題につながることは明らかであろう。したがって墓地の造成が住職の重大な関心となるのである。しかし無制限に檀家数は増加していかないのだから一寺院として、また現在は有効であったとしてもその限界があることは明らかであろう。

◆したがって現在の真言宗智山派のように檀家数100未満が61%もある宗団ではいかんともしがたいのである。手の打ちようがないのに等しいのである。したがって寺院―檀信徒の関係も教化のありかたも別の観点が求められることになろう。

しかしながら、つくしあい運動をはじめとする各宗団が進めた教化運動はこの範囲を出るものではないであろう。何故なら、それは従前の行事に内容的な肉付けをすれば、一度去った人心が再び寺院に帰って来るであろうという期待感に溢れているものであり、あるいは家から個人にネライを絞れば自分の問題として取り組むであろうという形式上の問題に思われるからである。寺院の行事、活動に参加することによって、個人の問題は解決するという予見が強すぎ、教師自身が「人間として生きるには」という問い掛けが見られないのである。その背景は既に指摘したように、教師―出家者、檀信徒―在家という垣根が除かれていないからであろう。

ところで、教化運動の推進には「寺を強くすること」も目的の一つにあげられているが、今のシナリオに照らせばどうであろうか。

◆ 食べる寺には既に実行されているので必要はなく、食えない寺には手を出せないでここにも必要が認められない。また寺院のありかたとして、◆ 職業としての寺でよいのであろうか、いいかえると葬儀や法事の補完的活動に終わる教化になるのではないかという疑問がある。信仰をもって生きる、信仰心を養う道場としての寺づくりが目指されるべきではないのか。第三に◆ 僧侶、教師の社会的役割はどうなのであろうか、あるいは宗団の社会的責務という発想は必要ではないのであろうか。

『つくしあい手帳 つくしあい運動の理解と展開』（昭和46年智山派宗務庁）において、那須能化のおことばに、
1 原始仏教々団における三宝、2 現代真言宗における三宝、3 帰依三宝は入門の条件、4 僧伽の目的とその活用を説かれた後、具体的な実践として、

「住職が檀信徒の一人一人と、膝つき合わせて話し合うことがなければ、真の教化は望めないであろう。」
といい、僧伽の活用として

「わが智山派三千ヶ寺が、毎月両祖の御命日に法要を修行し、檀信徒の参詣者と種々語り合うように出来ないものであろうかと」、続けて「死生観の徹底を期すると共に、真の幸福を得せしむよう、指導しなくてはならぬが、…」
…」結んでおられる。

たしかにそうなのである。だが待って下さい。宗祖を亡父母・先祖におきかえれば体裁のいいご法事である。くりかえすことになるが、この場面での親の徳や、親の慈愛は説かれても、親のエゴや我愛、あるいは人間としての悪業は語り得られるであろうか。むしろ死者を美化することが心情として許されてきたといえるであろう。したがって生死の問題など論じられる場面ではないのである。つまり、発想のレベルと実際の現実のレベルとの隔たりがあることにまず気がつく必要があるのである。

次に住職の姿勢は伝統を守ることで極めて保守的になる。総合調査の結果に示されるように、教師は社会の諸問題の中、家庭の問題に関心や興味が多い理由も、祖先供養が教化の中心課題であるからであろう。

それにもかかわらず、このような現状に対して何の問題提起も危機感も表明されないとここにこそ、隠れた危機が迫っているのである。むしろこのような（危機的）現状のなかで安穩な夢を貪っているのが伝統であり、それは（いわゆる）事相としてあらわれ、それを支える伝統教学である。これに則った教育が実施されているのであるから、筆者の意図する教化活動が推進しない理由もここにあることは明らかであろう。

実に教化推進を阻む最大の問題は伝統教学にあったのである。それは例えば同和の問題に対する姿勢について如実に示されているといえよう。伝統教学（教相）のありかた、また現実の諸問題に対する研究など検討されるべきであろう。事相もまた同様の批判がなされるべきであろう。

しかも我々は葬儀という厳肅なる儀礼を行うがゆえに、この本質的な違いを見逃し、更に悪いことには葬儀、法事につらなる祖先供養が寺院の経済的基盤を支える台所であるがゆえに、ここにメスをいれる勇気をもたないのである。

しかし、教学が人心の平安を目指すのであるなら、教化推進の旗印を教団存続の根本とし、現代の社会の諸問題に応えていく教団体制づくりを目指すなら、以上の指摘はさけては通れない課題である。

このような教学のありかたを体系的に再興しなければ、何一つ動かないのである。その基本は一人の人間として生き、人生をまっとうしていく筋道であり、それを教学体系として考えていく必要があるのである。これらのシナリオは「死をみつめて」いいかえると「生死をみつめて」にゆずらう。

シナリオ② 「死を見つめて」

「死者をみつめて」と「死をみつめて」とは《者》があるか、ないかであるが、しかしその意味、内容には大きな隔りがある。さあ、さあご覧下さい。

それは死者をみつめてのように、病院の場から始まる。ただしそこは産婦人科である。「お誕生、おめでとうございます。」生まれた自分が主役である。しかし、お七夜、初参り、七五三などは幼少であるがゆえに親任せであることは止むを得ない。しかし、もの心がつき、中学、高校の年代になれば、自分なりに、自己の問題に取り組み、それを解決していかなければならない。勉強、友達、恋愛、人間関係、家族のことなど問題は多岐にわたる。その時、何かより所が必要であろう。その指針が菩提寺の教えであればいいことはない（しかしそれが新宗教であっても、当人にとっては問題はない。寺院にとっては大問題である）。過去が中心の、先祖に対してどうするか、の発想ではなく、これからどうするか、自分の未来に向けての発想が中心である。ここにご本尊との縁が生まれる。うまく事が運ぶのも、失敗するのも、自分の責任で選んだ道であり、結果はご本尊の加護によるものとうけられる。うまく事が運ぶのも、失敗するのも、自分の責任で選んだ道であり、結果はご本尊の加護によるものとうけられる。ご本尊の誓願が当人の生きる指針である。したがって家族にご不幸、病人、事故が続いたりしても、靈感商法のようにその原因を他に求め、他に責任転嫁をして自己のありかたをうやむやにすることはない。むしろその種の問題には毅然とした対応ができる。つまりは因習をはねのける力、信仰心が養われていくことになる。

このような人間形成のコースができるには、教師の情熱と日常の実践活動が必要である。教師が黙ってはお客は来ない。教師が人々の眠っている意識を刺激しなければ、人々は目を覚まし、耳を傾けてこない。年に一度の恒例の行事ではなく、月例の、連続性のある、目標が明らかな活動が必要である。この活動を支えるものは教師の

主体的な生き方であり、ご本尊のユガ冥合の結果から生れる叡知と情熱であろう。その対話が教師の人格を通じて個人から複数へと展開される。したがって教師は本尊に問い掛け、しかも信徒と語り合う中で、自己中心的な考えや、狭い視野を修正し、教師自身が人間的に深まっていくことになる。

出家と在家という関係ではなく、同じ目標を目指し、法の道を歩む同行二人の関係である。このような人間集団は檀家に限られるものではない、むしろ意欲のある人々の集団が形成され、この結果ご本尊の誓願が集団のあり方の基調となるであろう。

人々一つにはご本尊の誓願を鏡とし、一つにはお互いの情報交換、切磋琢磨によって、自己を見つめ社会を見て、参加者それぞれが問題を検討し、問題解決に一石を投じることになる。それは心を深めていくことであり、『大日経』のいう《心品転昇》の営みと考えられる。ここでは寺院―墓地―檀家ではなく、本尊―教師―信徒の関係である。

まとめにかえて

このような《死を見つめて》の視点にたてば、教師研修の内容もまた、寺院の存続―伝統的行事から、教師の生き方―教化活動に視点を換え、重点的に実施されるべきであろう。教師の内面に率直に訴えかけるものは、現実の社会の諸問題、その対応であろう。なぜならそれは教師自身にとって自分なりの解決を求めべき問題であるからである。つくしあい提唱のビジョンもここにあったはずである。しかし、それが具体化しなかった理由、背景は既に指摘したとおりである。

シナリオ―「死者をみつめて」はいいかえれば「死者に対するかかわり方」をいうのであり、『寺院の存続』に

おきかえられる。この方面には檀信徒側の強い要望があるので寺院は形式的に繁栄するものと思われる。しかし、それでは現代社会に我々は教師として存続していけるのであろうか、むしろ厳しい状況に追い込まれていくのではないか。したがってシナリオ2「死を見つめて」に立つべきであろう。これは自分の問題として死にどう対処するか、いかに生きるかの問題である。この視点から寺院、教師の質的現状を洗い直す必要がある。寺院を支える寺庭婦人や後継者、子弟の問題にもメスを入れなければならないであろう。ここで寺院の一員として寺庭婦人の問題など新しい問題が出てくる。